

5

「地上埋蔵文化財 —そこにあっても見えないもの」

木下 直之

「広場の曼荼羅」の痕跡

○木下 みなさん、こんにちは。木下です。私は西村先生、藤井先生の背中を追いかけて、来年の春に東京大学を去りますので、今日がこの大学についてお話を最後の機会かもしれません。そこで、みなさんに一番伝えたいことをお話ししようと思ってまいりました。キャンパス計画室の果たした大きな役割等については、後でディスカッションのときに私からもお話ししたいと思いますので、まずは私の話題を提供します。

「地上埋蔵文化財」などという言葉はないですよ。私が勝手につくりました。まずは埋蔵文化財とはどのように定義されているのかを確認しましょう。これは1950年にできた文化財保護法が規定する概念です。この法律を厳密に読むと複雑なのですが、地中から出てきたものを誰が埋蔵文化財と判断するのか、ということがまず問題にされます。土の中から出てきたわけですから遺失物として扱われます。教育委員会が当該物件を文化財と認めるか、認めないかという以前に、持ち主は誰かが問題になるので、警察署長が登場するのです⁸⁷。

87 昭和25年法律第214号「文化財保護法」第六章「埋蔵文化財」より、
(提出)

第百一条 遺失物法第四条第一項の規定により、埋蔵物として提出された物件が文化財と認められるときは、警察署長は、直ちに当該物件を当該物件の発見された土地を管轄する都道府県の教育委員会（当該土地が指定都市等の区域内に存する場合にあつては、当該指定都市等の教育委員会。次条において同じ。）に提出しなければならない。ただし、所有者の判明している場合は、この限りでない。（鑑査）

第百二条 前条の規定により物件が提出されたときは、都道府県の教育委員会は、当該物件が文化財であるかどうかを鑑査しなければならない。

2 都道府県の教育委員会は、前項の鑑査の結果当該物件を文化財と認めるときは、その旨を警察署長に通知し、文化財でないとして認めるときは、当該物件を警察署長に差し戻さなければならない。

つまり、発掘をして土の中から出てきたからといって、すぐに文化財になるわけではない。それは単に埋まっていたものであり、わざわざ地中から掘り出されたものである。人が価値を与えて、初めて文化財になるわけですね。同様に、地上にも価値を与えられないまま眠っている貴重なものが数多くあるのではないかと考え、「地上埋蔵文化財」なる言葉を編み出したわけです。

これは一先ほどの西村先生のお話でも紹介されましたけれども—総合図書館前の地下広場に書庫を建設するために発掘が進められ、そこから出土した加賀藩邸の水路です（図28）。写真の奥が現在の図書館で、さらに奥に

溶姫の御殿がありましたので、御殿の排水がこの石造りの水路を通して流れていたようです。水路にもピンからキリまであって、もっと下級藩士の住居ゾーンになると木でつくった水路です。ですから、これはかなり上等の水路であると言えます。この水路の痕跡を図書館前広場に示しています（図29）。

ある日大学に来るときに、朝、子供たちが水路の痕跡に沿って楽しそうに歩いているのを見かけました。これがただの広場であつたら、子供たちはこんな行動をとらなかつ



図 28 「藩邸水路」 撮影：木下直之，2013 年



図 29 「再生水路とこども」 撮影：木下直之

ただろうと思います。あるものが埋め込まれたことによって、この広場がまた違う意味を持ち始めているのかもしれませんが。このデザインをされた建築家の川添善行（本学生産技術研究所准教授）先生にもその日にすぐに知らせてあげました。ただ、ちょっと心配なのは、水路の石材が薄過ぎないかなということ。埋め込む時に、もとの石材をかなり薄くスライスしたのです。私もできるだけここを歩くようにしていますが、そういう人が沢山いると石材が磨り減ってしまうのが心配ですね。

この水路の痕跡は、ここで話題にしたい「地上埋蔵文化財」ではありませんが、地上に現れた埋蔵文化財をもう一度埋め込んだという意味では、これもまた「地上埋蔵文化財」かなと思います。

これから話題にする地上埋蔵文化財はこちらです。文学部三号館のあたりを歩いてみると、地面に石が埋め込まれている。さらにモザイクも残っていましたが、現在は姿を消しました（図30）。



図 30 「曼荼羅」 撮影：木下直之、2014年

この一連のデザインは一体何でしょうか。これらが文学部三号館と関連していることは、何となくわかりますね。文学部三号館の敷地の平面図、つまりこの図書館前広場が1980年代にデザインされたときのプランが残っていま

す(図31)⁸⁸。このプランの一部が、先ほどみたデザインなのです。

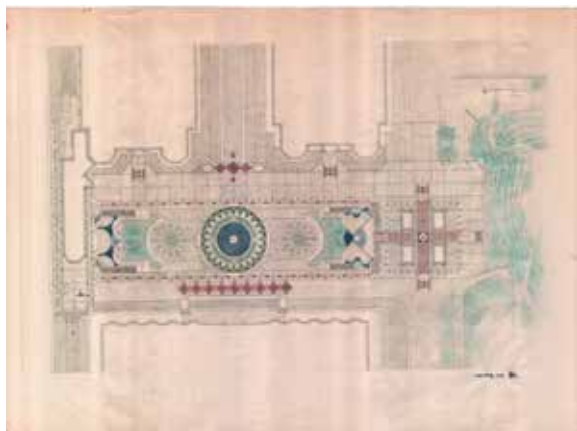


図31 大谷幸夫「総合図書館前広場デザイン案」(所蔵：東京大学文学部)

文学部三号館の下にはサンクンガーデンと呼ばれる庭がつけられていました。この庭も平面図にもとづくダイナミックなデザインが施されていたわけです。現在は、広場の下に図書館に、ここから入っていくというアプローチがつけられたことで、全体が平板になり、すっかり性格を変えました⁸⁹。現在は、先ほどから話題になった旧図書館の礎石の一部が置かれていますが、これがなければ、「やはり元のガーデンのほうがよかった」と言われるのではないかと思います。礎石をここに置くことによって、それまでの広場の空間の意味を変えつつ、記憶の継承を行いたいのではないのでしょうか。

先ほど紹介した図書館前広場のプラン(前掲図31)は、「広場の曼荼羅」と大谷幸夫⁹⁰先生が名付けたものです。この図面は文学部の学部長室にあるのですが、右下に「一九八六年八月幸夫」と名前が入っています。下が図書館です。そして、右側には三四郎池までが描かれています。大谷先生がちょ

88 東京大学キャンパス計画室編 [2018: 143] 「総合図書館前広場デザイン案」も参照。

89 東京大学キャンパス計画室編 [2018: 173] 「新しい図書館前広場」。

90 大谷幸夫。1924-2013。東京生まれの建築家。1946年東京大学第一工学部建築学科卒業、同大学院に進学し丹下健三研究室に入る。1964-84年東京大学工学部助教授・教授。1984-89年千葉大学工学部建築学科教授(日本大百科全書)。

うどこの広場の計画を立てたときに、こんな思いを『新建築』に書いています。

「私たちは第2次大戦の末期に、このキャンパスから文科系の先輩や友人たちを戦場に送った。そして、多くの人たちが未だ帰還していない。私には私たちの先輩や友人が、短い大学生活への思いを学園の中心であるこの広場に描いていたように思われてならない。私はこのふたつの建築に、そしてこの広場に、こうした先輩や友人の思いを印しておきたいと思い、またこの広場に迎えたいと思った。そして建築がその骨格をあらわにした頃、私の中にあるこの願望を「広場の曼荼羅」と題する図にまとめてみたのであるが、この広場が、学園の中心として大勢の人びとのさまざまな思いを託しながらこれからも少しずつ整えられ大学の歴史を刻んでくれることを願っている。」⁹¹

文中の「ふたつの建築」とは、文学部三号館と法学部四号館です。この二つが東西に立ち上がることによって、図書館前広場が若干閉鎖的な空間になりました。この写真(図32)は一年代が特定されておらず、今回出版された『東京大学本郷キャンパス』に収録されていないのですが—この広場を昭和の初めに撮った絵葉書だと思います。ご覧のとおり、広場は開かれた空間で



図32「机上ヨリ見タル帝国大学前掲及比不忍池方面」絵葉書『新大東京名所』所収
所蔵：(公財)東京都公園協会みどりの図書館グリーンアーカイブス

91 大谷 [1988].

した。それを法学部四号館と文学部三号館によって閉ざしたことで、戦歿者慰霊の意味を持たせようとしたことがわかるかと思います。

東京大学における広場の意味と戦歿者慰霊

これから、東京大学における広場の意味、あるいはオープンスペースの意味を考えてゆく上で、念頭に置きたいことがあります。図書館前広場の地下には大変大きなボリュームの地下書庫が建築されました。それはこの図書館にほぼ匹敵するぐらいの容積ですが、地上でそれはわかりません。まして、ここはオートメーションで本を出し入れしますので、我々が中に入って、その大きさを実感することは一工事の途中で見学会はあったのですが一できない。結局、この広場は地上だけでしか体験できない。そのような条件のもとで広場の意味がどのように変わり、これからどのように変わるべきなのかを考えてみたいと思うのです。

この地図(図33)⁹²を文書館で見つけたときに、随分とシンプルだなと思いました。現状と比べると、構内がとてもすっきりしている。図書館、そして懐徳館だけに斜線が引かれている。これは1941年か43年のもので、東京大学職員及び学生の戦歿者慰霊祭の案内状なのですね。慰霊祭の式場は図書館で、その後に懐徳館で接待が行われたようです。先ほど藤井先生も話しておられましたが、洋館の懐徳館に代わって現在は東大の迎賓館に当たる木造建築があるのですけれども、容易に入れられない場所になっているのが残念です。当時は文字どおり迎賓館として



図33 「慰霊祭案内図」『支那事変戦歿者慰霊関係』

所蔵：東京大学文書館

92 東京大学キャンパス計画室編 [2018: 121] 「慰霊祭案内図」。

使われていたわけです。

この案内状を綴じた簿冊が、文書館に二冊残っております。そのうちの一冊が『支那事変戦歿者慰霊祭関係』という簿冊です。この存在を、私はかなり早くに知りました。東大図書館のレファレンスコーナーに置いてある目録の中に、ガリ版刷りのぺらぺらのものがあり、それを見て慰霊祭関係のものが少なくとも二件あることがわかったのです。目録を作成してくださった先人に感謝します。

ただ、実際に簿冊を開いたのは、ずいぶん後になってからのことです。現在は、文書館で見ることができるのですが、調べてみると、昭和16年10月10日に「支那事変戦歿者慰霊祭」が開かれたことがわかる。これが会場の図面です（図34）。図書館の中に祭壇がつくられて、関係者が並ぶ。そして学生、職員が立席で参列しているとい

うのがわかるか
と思います。慰霊祭の様子を写した写真もあります（図35）⁹³。この画面をよく覚えておいてください。

それからさらに戦争が激しくなり、戦歿者の



図34 「(支那事変戦歿者慰霊祭会場図)」所蔵：東京大学文書館



図35 「支那事変戦歿者慰霊祭」『支那事変戦歿者慰霊関係』所収、
所蔵：東京大学文書館

93 東京大学キャンパス計画室編 [2018: 121] 「支那事変戦歿者慰霊祭」。

数が増えますので、昭和18年に再び慰霊祭が催されます。ただ、今から思うと、びっくりするぐらい戦歿者数が少ないですね。実はしっかりと把握できていなかったのです。1995年に戦後50周年を記念して学徒出陣の調査をようやく東大が立ち上げたときでも、やはり戦歿者数を把握し切れませんでした。先ほどの大谷先生は「文科系の先輩や友人たち」と書いていますが、実は医学部に戦歿者が多い。これは言うまでもなく、軍医として前線へと送られていったからなのです。

戦歿者記念室は、どこに設けられたかという、図書館のこの一角です(図36)。一しかも恒久的な設備でした。先ほど注目してほしいと言った写真がほぼ同じ場所です。この写真は近年の図書館の改修中に撮ったものですから、椅子が積み上がっています。

東京大学は戦歿者の慰霊をどのように行ってきたのでしょうか。『東京大学本郷キャンパス』に収録した戦歿者記念室の写真⁹⁴には、白木の箱が置かれている。未確認ですが、この写真は慰霊祭で撮られたものではありません。箱の中には遺影が収め



図36 「記念室跡」
撮影：木下直之，2016年

られており、その遺影は文書館に残されております。遺影は、戦死された方の遺族から集めた写真を複写して、同じスタイルにそろえて作成されました。そういったことが簿冊に記録されています。

遺影作成は、日露戦争時からすでに行われておりました。日露戦争で帝国大学出身の戦歿者は一当時は「忠死者」という言い方で呼ばれていましたけれども一遺影がかなり大きな額に額装され、図書館で祀られていました。二つの額は、図書館が関東大震災で火災に遭った時にいっしょに焼失したと思われます。

94 東京大学キャンパス計画室編 [2018: 121] 「戦歿者記念室」。

『学士会月報』⁹⁵にこれに関する記事が載っています。忠死者の肖像額を調製した。それでこれを披露する。二十八名である。「忠死者の英名偉蹟は青史に載せて朽ちざるべく、其精神は後世に伝えて滅せざるべく、其肖像是長く館内に存置して追敬せらるべきを疑はぬ」と、当時の総長が語っています。

実は市川紀元二という工科大学出身の学生が日露戦争で戦死をしました。学士の戦死は珍しく、すぐに銅像が御殿下運動場を見下ろす場所に建立されました。この人物は日露戦争の戦死者なのですが、ほぼ40年後、昭和18年の学徒出陣を前に東京帝国大学新聞が、この先輩の後に続け、という戦意高揚の記事を書いています。この銅像は今はどこにあるかというと、戦後東京大学を追われまして、静岡県磐田市の出身だということもあって、静岡県護国神社に台座ごと移設されています。

台座には、「工学士市川紀元二銅像，設定意匠塚本靖」というプレートがはめ込まれています。先ほどの角田さんの話にも出てきた塚本靖という人は、記念碑や、このような銅像の台座にかなり関わっていた人です。末尾に「明治41年11月11日東京帝国大学構内竣工，昭和33年8月31日静岡県護国神社境内移設」と刻まれています。

これはロンドンのUCL (University College London) を訪れたときに、たまたま出くわした光景です (図37)。たまたま出くわしたといっても特別な



図 37 「UCL 正面」 撮影：木下直之

95 学士会 [1907]

日ではなくて、ちょうど昼休みだったのですね。たくさんの学生たちが大学本部の前でおしゃべりをしたり、食事をしたりしている。そういう普通のシーンなのです。これを見たとき、東京大学にはこんなに多くの学生が集まる場所はないな、と思いました。学生紛争のときの安田講堂前は違っていた、あの時は密集していたと思いますが、今は本当にそのような場所はない。かろうじて改修前の総合図書館玄関の石段が学生の座る場所だったということをお憶えておりますけれども、ロンドンでこの光景に出くわしたときには驚き呆れました。多分、日本人同士であれば、この間隔は近過ぎる、接触を嫌って、ここまでは密集しないと思うのです。

さて、ここで見ていただきたいのは、彼らの背後の壁に刻まれた銘文です。「1914年から1919年、この間に彼らの祖国のために戦って死んだ仲間たちを忘れない」、ということが刻まれています。

東京大学がやってきた戦歿者追悼は敗戦で見事に途絶えました。それを、大谷幸夫先生が「広場の曼荼羅」で再び図書館前広場に取り戻そうとしたということが言えるのです。キャンパス計画室の話し合いでもこの広場が慰霊の場であったことは、もちろん話題になりましたし、設計の川添善行先生も承知の上です。さらにまた次の時代に向けた新しい広場、あるいはオープンスペースと言ったらいいのでしょうか、人が集まる場所をここにつくり出そうとして、新たなステップを踏み出したように思います。

西村先生のお話にあったとおり、当初は何もない広場を構想していたのですね。ところが、発掘したら下から旧図書館、さらにその下から加賀藩邸の水路が出てきた。それならば、これらの記憶を組み入れようということで、こうした形になりました（図38）。基礎の上をベンチに変えたところ、結果的にはベンチではない何ものか、もっと多様な使われ方をしている。具体的に言うと寝転がったりしてますね。ベンチだとただ座るだけですが、それを超えた使い方が実際にここで起こっている。この広場はこれからどうなっていくのだろう、と楽しみです。いろいろな意味をこの建物は担ってきて、そ



図38 「ベンチ?活用」 撮影：木下直之

して、その前の広場もそれに応じた役割を果たしてきたのですが、これからさらに変わってゆくのかもかもしれません。

図書館団地のスクラッチタイムに見る連続と断絶

最後に一つ、気になっていることをお話します。総合図書館等が入っている建物を「図書館団地」と呼ぶことがあります。総合図書館竣工記念の写真帳⁹⁶に挿入された図面には一、二、三と番号が振られていて、一が図書館、二が史料編纂所、そして三が「将来の拡張」と書いてあるわけです（図39）。現在は、この将来拡張部分がすべてつながって、建物としては当初の計画どおりに完結しているわけです。これは、

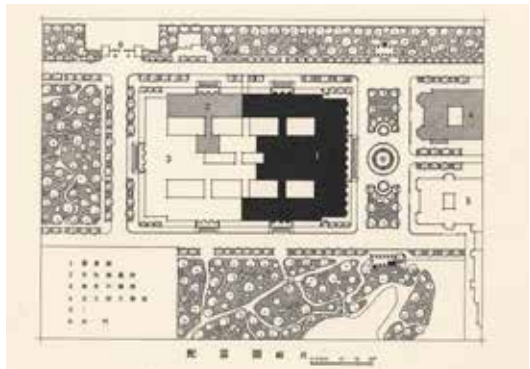


図39 「図書館団地図面」東京帝国大学附属図書館 [1930] 所収

96 東京帝国大学附属図書館 [1930].

図書館が単に拡張されたのではなく、社会科学研究所、それから新聞研究所—今は情報学環に名前を変えましたけれども—という戦後になって誕生した新しい組織とつながったということです。反対側では史料編纂所と教育学部がつながりました。



図 40 「明治文庫&教育学部」 撮影：木下直之，2017年

建物として一体化したのですから、古いスクラッチタイルと新しいスクラッチタイルがつながっている（図40）。これを連続と断絶，あるいは継承と忘却だと考えたとき，この連続面はいろいろなことを教えてくれるのではないか。断絶という意味で言えば，戦前のこの大学の教育を否定した上に新しい教育組織が加わった。それが社会科学研究所であり，新聞研究所なのです。戦後日本の再出発を教育から変えていこうという思いが，これらを生み出した。普通にはただの壁にしか見えないのですが，そのように読み取っていくこともできるのではないのでしょうか。これも地上埋蔵文化財にほかならない，と思うのです。

ご清聴ありがとうございました。

○鈴木 ありがとうございました。それでは，休憩を挟んで座談会に進みます。質問用紙を書かれた方は，受付に提出してください。